

へいちく再生の起爆剤となるか

筑豊・京築地域公共交通総合連携計画

地域の中心的な公共交通機関であるへいちくは、住民の身近な足とともに地域の活性化や環境問題等において、大変重要な役割を担っています。しかし、自家用車の普及や少子化・過疎化による利用者の減少、主要な収益事業であった貨物輸送の廃止等により、経営状況が悪化の一途をたどっていました。

このような状況の中、へいちくは自主的な経営基盤を築くため、平成17年度に「平成筑豊鉄道再生計画」を策定。この計画に基づいて設備整備を中心としたさまざまな事業に取り組み、経営改善を図ってきましたが、依然厳しい状況にあります。

また、地域公共交通活性化・再生策を実施するにあたり、関係主体（市町村・公共交通事業者・住民等）による協議会を設け「地域公共交通総合連携計画」を策定することができる「地域公共交通の活性化・再生に関する法律」が、平成19年10月に施行されました。この法律は「地域公共交通総合連携計画」に沿っ



て行われる各事業を対象に、国の補助制度の拡充などが図られることになっています。このことにより、地域公共交通の活性化・再生に向けた環境が整備されました。

そして、沿線自治体（直方市・小竹町・福智町・糸田町・田川市・香春町・赤村・みやこ町・行橋市）、地域住民、交通事業者、商工関係者、学識経験者などのメンバー20人で構成する「筑豊・京築地域公共交通活性化協議会」が設置され、平成筑豊鉄道を中心とした地域公共交通ネットワークを構築するための「筑豊・京築地域公共交通総合連携計画」が策定されました。この計画では、これまで検討し取り組んできたへいちくの経営改善に他の公共交通機関との連携や地域のまちづくり・観光振興等を併せ、利便性の向上や利用促進、維持存続の形成に向けた計画が盛り込まれています。

←企画・イベントに最適な車両「へいちく浪漫（ろまん）号」。観光振興での活用が期待されます。通常運行のほか、貸切列車も受付中。●平成筑豊鉄道 ☎22-1000

へいちくの3か年計画

紹介



維持存続のための新事業実施に向けて

夢が広がる

ちくまる農園で遊休地活用

金田駅構内の遊休地に整備された「ちくまる農園」が6月19日にオープンしました。かつて石炭やセメントの貨物線が敷かれていた構内にある、枕木で囲まれた農園は広さ約260㎡。近くに出番待ちのへいちく車両がずらりと並ぶ環境にあります。

農園に地元保育園児たちの手で植えられた「ベニアズマ」という品種のサツマイモの苗は約200本で、職員たちが空き時間に水やりなどの手入れをしています。サツマイモが順調に育てば、10月4日



↑セメント工場からの貨物が連なる駅構内（平成17年3月24日撮影）。

平成筑豊鉄道（以下へいちく）と沿線自治体等で構成する「筑豊・京築地域公共交通活性化協議会」は、国の補助事業の採択を受け、今年から3か年にわたる「筑豊京築地域公共交通総合連携計画」を実施することになりました。2008年度決算で5年連続の赤字となったへいちくは、累積赤字が約4千万円になっています。そこで沿線自治体とへいちくがアイデアを出し合った新事業により、イメージアップや乗客数の増加などを図ります。平成23年度までの総事業費約4千750万円のうち、約2分の1を国が助成。本年度の事業は、①金田駅構内にある畑のサツマイモ掘りに地元の園児らを招待、②沿線自治体の催しを知らせ、鉄道利用を呼びかける新聞折込み広告、③同社のホームページを充実、④沿線自治体の観光地とその最寄り駅を紹介するパンフレットの作成、の4つを計画して事業費は約630万円となっています。



↑「ちくまる農園」オープンでは、金田保育園年長と年中の園児58人がへいちく運転手の指導で丁寧に苗を植えていきました。

の「へいちくフェスタ」が収穫の時期になり、一般開放のイモ掘りなどのイベント開催が検討されています。

連携計画で取り組んだ新たな試みが成功すれば整備・拡張し、農作物の種類も増やす予定。今後は沿線地域の幼稚園・保育園の児童たちへの開放や、農園を活用した

新たなイベント、収穫した作物での商品開発など、夢はさらにふくらんでいきます。

【ちくまる農園ボランティア募集】
ちくまる農園では、日頃のお手入れやイベント時の手伝いをしてくれるかたを募集しています。
●平成筑豊鉄道 ☎22-1000